

あゆみ通信

VOL. 204
 あゆみの会(真宗大谷派大阪教区第2組同朋の会推進員連絡協議会)
 会長 細川 克彦
 広報 本持 喜康

親鸞のことば

死ぬまで消えない 煩惱を背負う

凡夫というは、無明煩惱れらみみちみちて、よくもおお、いかり、はらだい、そねみ、ねたむころおおく
 一念多念文意

「凡夫」とは「仏教の教えを理解していない人」という意味で、自己中心的に生きて苦悩する私たちのことを指しています。また「無明」とは、人の心を惑わす多種多様な煩惱の根本のことで、物事の道理に暗い状態と云っていいでしょう。私たちにはそんな無明煩惱が充満しているのです。

ですから、自分の思い通りに行かなかったり、自分より優れた人を見ると、すぐさま芽を出し、怒りや腹立ち恨みや妬みが生まれ、そこから逃げる事が出来ずに苦悩するのです。このように仏教は、苦悩の原因を他人や環境のと言った外側に見るのではなく、自身の心の内に見ます。これを「内観道」と言います。怒りや腹立ちの気持ちが出て来た時はどうすればよいのでしょうか。ある先生は次のようなことを言っています。「怒りや妬む気持ちが出てきたら、止めようとするのではなく、あつ、私の中から人間(の本性)が吐き出された、出てきたと思いなさい」と。ちょっと肩の荷が降りるのではないのでしょうか。

(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉」より)



新組長に池田英二郎 任職(宗恩寺)、副組長に松本隆信任職(西教寺) 決まる

さる3月3日(火)第2組の住職などによる組会が開催され、次期の役員が上記のとおり決まりました。

墨林浩組長(光照寺)は、2期6年を勤められました。この間、あゆみの会には、いろいろお世話になりました。ご苦労様でした。なお、新組長と副組長は4月1日から3年間の任期でお世話になります。

第41回第2組同朋大会開催



2026年3月7日(土)午後2時から難波別院同朋会館講堂を

会場に、組内の住職、坊守、寺族と門徒、推進員等59名が参加して、第41回第2組同朋大会が開催されました。

進行は武石由美住職(専行寺)で、真宗宗歌斉唱で開会。次いで、池田英二郎副組長(当時・宗恩寺住職)の調声で、正信偈、同朋奉讃式念仏和讃を全員で勤め、続いて墨林浩組長(当時・光照寺住職)が開会の挨拶を述べました。



そしてプログラムの最初は、相愛大学音楽部トロンボーンアンサンブル(4人)の演奏が約30分間行われました。はじめに荘重な響きで「恩徳讃」が演奏され、続いて「天地創造」その他が演奏されました。曲ごとに会場からはたくさんの拍手が起こりました。初めはトロンボーンの大音にびっくりしましたが、だんだんとその音楽に皆、ひきいられるようでした。

続いて記念法話に移り、講師は真宗大谷派教学研究所助手の梶哲也先生で、「老・病・死を見るー仏教の課題にみる「煩惱」の意義」という講題でお話くださいました。

先生はまず、「仏教徒とは

住職からのエール

持病の坐骨神経痛で、しびれと痛みで歩行が困難になり、ブロック注射に期待したものの、効果なく、大事な寺通いも出来ず、我慢が出来ず、愚痴を住職にLINEしていたら、寺報「慈光」が届きました。巻頭言に、金子大榮先生の「癒る力と癒す力」がありました。

曰く、病気には癒る力と癒す力があり、癒す力は医者力だ。癒る力は病人にあり、因縁で言

は「縁」だ。でも、病人は癒す力だけを考えると、癒る力を忘れていて。だから信心によって癒る力に立ち返っていく。癒る力に立ち返れば、病気は癒る力があるかないかのひとつの訓練だ。病めば病むほど長生きするのも訓練を積んできた感じがする。だから、癒る力があれば癒してもらえと言うことで、癒す力は医者に任せてお与えに預かった癒る力を粗末にしないようすることが真宗的であ

ると思います。

このように病むと言うことも、自分の生命に対する自覚を促すものになりますから、病は苦しみに違いないが、その病むことに「生」の意味を受け取っていく道があるのだと思います。

まさに、住職・前住職からの励ましのメールでした。不安で、迷う自分に、心の奥底の法蔵菩薩さんが共に居てくれることを思い出させてくださっているのです。聞法第一。(本)



何か」と言うことについて三つの意味が有ることを話され、第1は仏陀の教えであると言うこと。第2は、ブツダの覚りの内容である。第3は、仏になるための教えであり、特に第3が重要であると話されました。そしてお釈迦さまはどういう経緯でブツダになられたかと言うことについて、「過去現在因果経」と言うお経の言葉をスクリーンに映写しつつ、有名な「四門出遊」のお話をされました。

国の王子であった釈尊が、行楽のため何度か城門を出たとき、老人と病人と死者に出会われ、自らもそのようになることを避けられないと知って、苦悩され、行楽を止めた。

そして、4度目に城門から出たとき、沙門(修行者)に出会われ、老病死の苦悩を克服するため、王子の位を捨てて、自らも沙門になられたと。そして菩提樹の下で思索され、縁起の道理に目ざめ、仏陀になられたと。

先生は、私たちは老・病・死を見ても、すぐ忘れてしまい、出家と言うことまで考えないけれど、お念仏を申し、聞法することは不思議なことではないでしょうかと結びました。

最後に、中嶋ひろみ第2組門徒会長(光照寺門徒)が閉会の挨拶を述べ、みんなで恩徳讃を唱和して閉会しました。



(レポート：細川克彦〈佛足寺門徒〉)

紙上法話

罪が深いと照らされる2
即應寺前住職 藤井善隆

根源に、阿弥陀仏に南無せよとは、私の分別思い計らいが間に合わないと言うことです。根源とは、私が思うより先に事実が来ていると言うこと。

東井義雄先生が、五歳の男の子がつぶやいたという言葉を紹介されています。



東井義雄先生

僕の舌 動け
というときは
もう 動いた
あとや
僕より先に
僕の舌

動かすのは何や?
(「仏の声を聞く」東井義雄より)

そうですね。舌は僕が動けと言う先に動いてますね。

また、三島清円師の紹介くださった小学校2年の男の子の詩。

道を歩いて、ふと気がつく
両足が大地を踏みしめて歩いている
右足…左足…右足…左足…
不思議だなあ… ごめん…
ごめん…

(「門徒ことば」三島清円著法蔵館より)

これ、すごいですね。我々は道を歩いて当たり前でしょ。でも、このお子は、ふと気が付いた。「どうして?」って。努力も何もしていないのに、足が大地を踏みしめて、右足、左足、右足、左足って、間違わないように歩いている。

**佛足寺同朋の会
学習会ご案内
歎異抄と真宗の教え**

第2組の佛足寺では、「真宗の教えって?」「歎異抄ってなに?」をテーマに、下記のとおり講座が行われています。参加費は無料です。どなたでもご参加いただけます。お待ちしています。



記

日時 **4月18日(土) 15:00**
会場 佛足寺(天王寺区北河堀町)
講師 **藤井 真隆先生**
(第2組即應寺住職)

聞法会スタート

今年は「宗祖の言葉に学ぶ」を柱に、「一念多念文意」を学びます。ご参加をお待ちします。

日時 **4月30日(木)14:00**
会場 紹隆寺(天王寺区堀越町)
内容 お勤めと法話
講師 **大橋 恵真先生**
(第18組 遠慶寺住職)
参加費 500円

「ふしぎだなあ」と感じた。この「不思議だな」が大事なことです。

当たり前前にしていたことを、「ごめん」「ごめん」と謝っているのです。

先に紹介した「草にすわる」で、自分の間違いに気がついたと言うこともみな一緒です。草に座るって、何も草原に限りません。草を「いぐさ」だとするとお寺の本堂の畳です。聞法の場所です。聞法と言うことは、平生の私の姿が見えてくる。間違っていたな、迷っていたな、お粗末でお恥ずかしいことだった。本当に罪深いなど、仏の智慧をいただいて見えてくることなのです。

(大阪教区第21組「推進員報恩講」講話録より引用させていただきました)